

商都宇都宮

宇都宮市文化財保護審議委員会委員

大嶽浩良

1 嘉永7(1854)年「家業自慢」(福田重徳『宇都宮城下史』昭和8(1933)年)

①最も古い旧家

- ・昭和7(1932)年の調査によれば、宇都宮に住した先祖の没年より200年以上続く家は80家を数えた。最も古い家5軒を挙げる。()内は大嶽注

天正4(1576)年4月 大町 荒川藤吉

慶長7(1602)年11月 馬場町 中里市正(宇都宮大明神神主)

慶長8(1603)年5月 池上町 植木藤右衛門(化政年間〈1804～30〉の町年寄は長江家〈大町〉・森田家〈日野町〉・植木家〈池上町〉の3家)

慶長12(1607)年 大町 松本甚左衛門

元和8(1622)年8月 大町 福田清兵衛

②宇都宮大明神天水桶献納者

- ・文政6(1823)年、町内商人が連名で宇都宮大明神へ天水桶を献納した。願主は上野久左衛門、大世話人増淵喜右衛門・横倉利兵衛、二荒山講中人池上町 植木藤右衛門・以下70名略

③嘉永7年の豪商

- ・嘉永7年「家業自慢」は宇都宮町の豪商を綴ったものである(資料1)。

東方 大関1名(崎尾新右衛門)・関脇1名・小結1名・前頭73名

西方 大関1名(菊地孝兵衛)・関脇1名・小結1名・前頭73名

計152名

(注)横綱の地位は明治23(1890)年に創られ、それまでは大関が最高位。

- ・この中で以下の3軒、即ち

大関 荒物・金貸、日野町 崎尾新右衛門(荒物一ざる・箒などの家庭用品)

関脇 呉服・太物、日野町 奈良屋玉尾与兵衛(太物一綿・麻織物)

前頭 呉服・太物、鉄炮町 佐野屋鈴木久右衛門

幕末に謳われた都々逸(7・7・7・5の口語調で唄った俗曲)に登場する。

「粋な荒新、小粋な奈良屋、野暮は佐野久にとどめさす」

- ・佐野久とは佐野屋鈴木久右衛門のことで、以下の通りの盛衰をたどる。

「佐野久の勃興時代は遠く元禄時代と云はれ、家世鉄炮町に大店舗を構へ呉服太物商を営み東北一帯の華客を抑へて東京、両毛、八王子、甲州あたりまで織物を三十余支店を通じて一手に捌き、江戸の間屋を左右する程の勢威を有し一年の取引高百万を下らず、倉庫十余棟を有し精確な日計を立てるに困難である程の繁栄振りであった。」

- ・佐野久のその後一向明公園となる(鉄炮町3221-1)

明治9(1876)年6月 天皇東北巡幸の際、日光巡幸にあたって往路・帰路とも鈴木久右衛門宅が行在所となる。

明治14(1881)年8月 奥羽・北海道巡幸に際し、再び行在所に。

明治17(1884)年 県令三島通庸は県庁新築・監獄署の移転改造、道路開削のため佐野屋に9000円の寄付割り当て、渋る鈴木を警察に拘禁。

明治42(1909)年、佐野屋廃業。

大正4(1915)年 市が31,800円を支出して買収。
大正10(1921)年 向明館竣功式典。
昭和8(1933)年 文部省から史蹟に指定。
昭和20(1945)年7月 宇都宮空襲にて焼失。
昭和21年 政令により解除となるも公園として現在まで続く。

④菊地孝兵衛家

・西の大関、呉服卸、寺町佐野屋、菊地孝兵衛家について

「寺町 菊池次郎氏 菩提所 寺町 生福寺

明治維新前の巨商と云ふ巨商は殆んど七転八起、大半は没落してゐるが一人燦然として天真爛漫そのものゝ如く今に豪家を以って子々孫々繁栄してゐるものに寺町菊池次郎氏がある。当時寺町は豪家町と云はれ呉服商古口長蔵、金融菊池次郎氏本家菊池治右衛門、太物商佐野屋吉田丹兵衛等いづれも軒を並べ堂々たるものにて、使用人も多く実に盛況を呈したものである。就中佐野屋菊池孝兵衛氏の如きは何れの金満家番付を見ても最高筆頭を占めて断然他を圧してゐる。今は孝兵衛氏の後をついた次郎氏を除けば当時の盛況を忍ぶ何ものもない。三郎氏の父即ち次郎氏の祖父孝兵衛氏は澹如教中と号し尊王の志厚く伊藤博文、土方久元氏等と交友し、義兄江戸の大学者大橋訥菴と共に関東方面に飛躍し、当時幕府の専横を憤慨し宇都宮の岡田真吾、児島強介、真岡の小山春山、下都賀の川連善昭、吉田村の河野顯三、芳賀の横田藤太郎、越後の河本杜太郎他水戸の志士等と相謀り閣老安藤信正を除かんとし、文久二年坂下門外に要撃して事ならず、終に捕はれ江戸牢獄に投ぜらる。後釈放されしも翌日、澹如・訥菴共に死亡せしは何れも蓋ふに幕府の高等政策によるものであろう。大正七年正五位を贈られ法名を義烈院真岸澹如居士、一門末代までの光栄と云ふべきである。現主次郎氏の父三郎氏は初代長者議員の栄冠を荷ひし人で、当時三十二才に過ぎない少壮政治家であつた。常に性温厚なれどもその半面才魂鋭気ありし好紳士であり、名門の出であるだけ長者連を一致せしめ大いに政治手腕を振ひ前途を囑望されてゐたが、日清戦役に際し広島で開かれた議会に列し、帰京の後下谷根津の別荘で生魚を食しコレラに掛り病卒す。東京の店は嫡子長四郎氏、宇都宮は今の次郎氏が継いだもので、温厚な次郎氏は政治投機等には一切触れず豪家としてガッシリした資産を維持している。長四郎氏も東京東海銀行頭取を歴任し再び東京より長者議員に当選した。因に菊池家は南朝の大忠臣菊池寂阿武時の後裔であると聞く。」

(注1) 坂下門外の変一文久2(1862)年1月15日、水戸浪士を中心とする尊王攘夷派の志士7名が、江戸城坂下門外で老中安藤信正を襲い負傷させた事件。信正が公武合体論を推進し、幕権回復のために和宮降嫁を実現させたことが尊攘派の憤激を招き、宇都宮藩の大橋訥菴を中心に信正暗殺が企てられた。暗殺は未遂に終わったが安藤政権は倒壊、以後、尊王攘夷運動が盛んになった。

(注2) 菊地教中は万延元(1860)年に、菊地を菊池に改めた。理由は、南北朝期の九州の守護大名菊池氏が南朝の征西将軍に従って活躍し、その徳を慕って改名したといわれる。

⑤商人の知恵—本郷町三峯神社の創建

「本郷町火防の神三峯神社は福田小兵衛の建造にて、天保三(一八三二)年二月廿三日に泉屋と久喜屋との間より(今の神社)発火し全宇都宮を焼土と化した大火ありて、之れが火元争ひから大悶着して奉行所の裁断する處となり形勢容易でなかつた時に、侠客を以つて知らる小兵衛が領主戸田侯に願ひ出て、久喜屋と泉屋の両失火と云ふことに成敗して此處に今後の不吉を除く為、神社を建てゝはとの提議に大いに喜び其の議を許可して呉れたので、自ら武州秩父の三峯山に赴き分身を乞ひ創せしものにて、今に丸屋構とて存在し、二百年近くの今日曾て一度も火災に逢はぬと云

ふはまことに奇と云はねばなるまい。当時丸屋でもその災に罷り見舞をうけた。残余のムスビに尺余の黒いうどんげが生い民衆を愕かせた。小兵衛之を「ムスビ」たり穂の神と称し社構に納めたりと。今市内にある三峯山神社は皆丸屋講中に合併し、年一度は講中の人秩父に参詣してその災厄を祈願している。」

(注 1) 丸屋—福田小平が経営していた市内随一の旅館兼遊郭。

(注 2) うどんげ—イチジクに似た落葉小高木でインド周辺に分布。仏教では三千年に一度咲くものとし、理想的な王者転輪聖王出現の瑞兆とされた。

2 尾張屋呉服店

①所在地と特徴

- ・所在地—宇都宮市宮島町角、電話一二五番、振替四七三一番（資料 2）
- ・近江商人など県外の商人が県内に進出し店を構える例は多々あるが、尾張屋は愛知県出身者で構成された。昭和 7(1932)年時点の経営者は小玉志郎氏。

②史料に残る尾張屋

ア、弘化 3(1846)年 10 月吉日 金持番付に「世話人 池上町太物 尾張屋善次郎」の名が登場。

イ、嘉永元(1848)年 宇都宮町金満家番付には「前頭 小間物 尾張屋豊次郎」（小間物—裁縫用品や婦人の化粧アクセサリーなど）。

ウ、嘉永元年 金持番付には「前頭 池上町 小間物 尾張屋豊次郎」。

以上から元は池上町、鉄道が開通してからは宮島町に移建したか。

③使用人

- ・大店では多くの使用人が雇われていた。その使用人たちは下から丁稚・手代・番頭(支配人)・老分という階級があり、一人前になるのは並大抵ではなかった。丁稚は 10 歳ぐらいで雇われ、はじめ屋敷内外の掃除や主人の送り迎えに使われた。2、3 年してはじめて店の煙草盆や下駄・番傘などの整理をやらされた。
- ・5、6 年たつと手代となり、元服を許された。この際元服の儀式と称して、主人は手代昇進の祝宴を開いて披露し、木綿の紋服または羽織を与え、主家の親族、実家の両親及び番頭らから帯・襦袢・羽織紐・煙草入・煙管・下駄など、それぞれの贈り物があった。同時に羽織の着用又は酒・煙草・表付下駄を許された。手代は番頭の指揮の下に適材適所で働いた。
- ・入店から 18、9 年あるいは 20 年の奉公の後、番頭になった。番頭になってはじめて仕入れ、販売の中核となって働いた。番頭の中で部屋住みで古い者が老分と呼ばれた。番頭になって 6、7 年目にやっと別家して妻を持ち、独立して店を持つ者もいた。

〔宇都宮市史〕第 6 巻近世通史編

④随筆に描かれた尾張屋

「遠き日の宇都宮」 相馬梅子（歌人）

（前略）

昔、戦前、宇都宮はもっとのどかだった。冬にはどっさり雪が降り、私達は雪合戦をしたり、大きな雪だるまを作った。春には、軍道の桜並木が、こんもりと花のトンネルをつくり、見世物小屋やサーカスののぼりがならび、おでん、おだんご、トコロテンなどの店々が客をよんでいた。

人々は花見にうかれ、仮装行列も出た。夜は夜で、電灯にうき出た夜桜見物に人々は行きかった。

眼をつぶると、あのサーカスのもの悲しい「天然の美」のジンタが聞えてくる。今の人、ジンタと言ってもわからないだろう、「空にさえずる鳥の声……」を、ジンタッタ、ジンタッタとならしたせいだろうか。

「さあさ、いらっしゃい、いらっしゃい、世にも不思議なロクロ首、親のインガが子にむくい」などの光景ももうかんでくる。

キッコーロクというデパートは名前だけ覚えている。角に尾張屋という呉服屋があって、ケードンとかいう番頭さんが、大きな風呂敷包みを背負って、よく伯母達に呉服を見せに来た。

あの頃の商店は、どこの店よりも早くと、競争で夜明けと共に店を開け、家の前の道路をきれいに掃除し、夜はおそくまで店をあけていた。

帳場では、ダンナさんが小僧達を集めて、そろばんの練習をしたものだ。小僧、番頭は何々ドンとよばれ、正月には「おしきせ」といって新しい半てんと着物が出た。棒縞の柄が多かった。(後略)

(『うつのみや』1976年初春号)

⑤尾張屋での使用人の一例—大嶽松次郎の場合(資料3・4)

明治40(1907)年 愛知県一宮市で大嶽吉次郎の3男として誕生

大正11(1922)年 15歳、高等小学校卒業。4月兄兼吉に連れられ来宇、尾張屋呉服店に小僧として丁稚奉公。途中、東京で「平和記念東京大博覧会」を観覧。

大正12(1923)年 16歳、9月1日関東大震災。この頃の小僧時代の厳しさを、晩年子どもたちに語ったが、同時に商人としての父を基本的に形成した時期でもあった。

昭和6(1931)年 24歳、番頭に昇格。何人かいた番頭の中で売り上げが一番だったと語った。

昭和7(1932)年 25歳、9月、尾張屋倒産。従業員は職を失い、父も僅かな退職金を基に小袋町で間借り、呉服の行商生活に入る。

(『うんちは松どん』大嶽松次郎追悼集)

(注) 尾張屋の倒産は色々理由が挙げられているが、基本は昭和恐慌(1930～32)に原因したと考えたい。

(参考史料)

1、番頭として売上高

証

一、金貳百貳拾六円七拾壹銭

売上高(二〇,六一〇)拾一ノ割

昭和六年

四月壹日

尾張屋呉服店印

大嶽松次郎殿

2、年間報酬

証

大嶽^(ママ)松吉

金貳百拾壹円四銭

売上歩金

金四拾五円也

特別月給一月ヨリ三ヶ月分

金五拾円也

年功賞

計参百六円四銭也

右ハ昭和六年度分前記之通り報酬ス

昭和七年四月九日

尾張屋呉服店印

(大嶽勝彦家文書)

3、チラシ「夏衣新柄陳列会」(藤田好三『宇都宮繁昌図譜』、資料5)

3 近代における宇都宮町の改造

①遊郭とその変遷

ア、都橋（旧池上橋）……杉原町と池上町の境にかかる城下随一の名橋

「行かうか池上、かへるか馬場、ここが思案の都橋（注1）」

これは当時の粋を語るもので、杉原町池澤伊兵衛氏附近一帯から池上・伝馬町にかけて柳の植込があつて灯籠などもあつた。折に触れて客人は此の杉原町都橋の袂に「腕をこまぬいて思案したりしと云ふ。また池澤氏宅は昔時は質商の関係で客は質草を金に替ふべく、繁昌したことはおして知るべし。今その遊郭の跡を記せば、

○伝馬町

◇丸屋（女郎屋）北側日光街道追分より五軒目とある。本陣上野新右衛門の筋向ひで側本陣である。

◇松屋（女郎屋）主佐藤喜平は問屋を勤め、廓主には珍しい傑物であつたと。

◇白木屋（女郎屋）

◇相瀬屋（揚屋*）

（以下7軒略）

*揚屋とは客が遊女を招いて遊興する家。招かれるのは高級遊女のみで、上層階級の顧客を対象とするもの。

○池上町

◇小林楼（揚屋）

◇丸治（女郎屋）

（以下23軒略）

○材木町

◇近世（女郎屋）

◇江戸屋（女郎屋）

（以下13軒略）

右の内、明治二十七年迄存在せしものは、同年現在下河原へ移転す（資料6、注2）。就中丸屋は明治七年に没落したため知る者は古老のみ、明治初年頃の娼妓は三町内併せて三百、四十名位であつた。以上また如何とも思はれる点ないでもないが、当時丸屋では一俵の米が二日無かつたと云ふから使用人の数も略想像される。

（『宇都宮城下史』）

（注1）この一帯は後に証券会社が建ち並んだ。これも現在は変貌しつつあるが、その以前は以下の銀行があつた。

第1銀行（明治21～26年）→宇都宮銀行（明治30～大正14年）→下野中央銀行（大正14～昭和5年）

（注2）明治27年、池上・材木町の貸座敷、南館に移転

②停車場通りの貫通、バンバの賑わい

ア、県庁移転 明治17(1884)年

イ、上野・宇都宮間鉄道開通 明治18(1885)年

ウ、停車場通りの貫通と新興繁華街バンバの出現

馬場町・相生町・千手町・大工町・小袋町の裏通りが一変し、駅へ真っ直ぐ抜けた。

池上町・鉄砲町・日野町などこれまでの幹線道路沿いの町の繁栄は、一変して中心が馬場町に移った。

^{ばんば} 広馬場と呼ばれた明神前の広小路は、明治期に盛り場に発展、大正・昭和期にバトンを継いでいった。大正期には活動写真時代を反映し、常設館が次々と建ち広馬場は大変賑わい、昭和期には常設の店舗（売店）が整備され、“バンバ仲見世”と呼

ばれる盛り場バンバが定着していった。その後バンバは第2次大戦により焼失する災難に遭うが、いち早く民間の手でバラックで営業を再開するなど、宮ッ子や近在の人たちの期待に応え復活している。そして戦後の仲見世風景は戻り、賑わいも衰えることはなかった。

(藤田好三『広馬場は宮の夢舞台』平成 24 年)

エ、東京風の呉服店 ― 亀甲六新築 大正 9 年(1920)

市内大工町株式会社亀甲六呉服店にては、東京の大呉服店に倣ひ、デパートメントストア式の洋館建築を思ひ立ち……(中略)……去る 15 日より起工するに至りたるが、新設洋館は 3 階煉瓦館にして 1 階・2 階共洋式便所・客用電話・化粧室及び休憩室を設け、尚 3 階には簡單なる食事場を作りて来客の弁当を弁する方法を執り、此外洋館後に店員の宿舎を設け、店員は夜間同宿舎に引取り、営業に必要な英語・習字・修身等の学科を教え、又新に女店員 30 名程を雇ひ、宿舎階下を之等通勤女店員の休憩室となす由

(大正 9 年 3 月 27 日『下野新聞』)

なお亀甲六呉服店は本市で 1・2 を争う呉服商であったが昭和 6 年(1931)に休業した。

オ、上野呉服店の進出

大正 14 年(1925) 本郷町の上野呉服店は馬場町に百貨店式の店を新築、非常な人気を博す。

〈成功の秘訣―県内に確固たる地位を築く〉

開店当日の売上げは 2 万円でした。これは現在の物価が当時の 5 千倍として試算しますと約 1 億円になります。それも 3 百坪弱の売場面積で稼いだ訳です。しかし、ここで注目することは初日の売上げばかりでなく、この景気が実に 6 ヶ月間の長期にわたって続いたことです。これは市内でたいへんな話題を呼びました。笑い話ですが、“おまえ、上野のベーキャップルとランチを知っているか。知らなければ古いぞ、早速食べて来い” というようなことがいたる所で言われていました。開店してから 6 ヶ月間、店の 3 階から見ると国鉄駅からバンバに向って人波が蟻の行列のように続き、入荷する商品を積んだ日通の大八車が、人波をわけて延々と続いていたそうです。

(上野修二郎「バンバ進出前後あれこれ」、宇都宮市馬場町々会『馬場町ものがたり』、昭和 56 年)

(参考) 上野百貨店の歴史

- ・本郷町上野呉服店の売り上げは、明治期末から大正初期の頃、宇都宮で 7 番目の売り上げであった(前述の尾張屋呉服店は 2～3 番手)。(聞き取りによる)
- ・市内の上客を顧客にすべく 14 師団首脳部や税務署長宅(後の総理大臣池田勇人)を訪問して廻った。
- ・黒羽町の植竹家から養子に入った上野小七(三井物産勤務)が婿に入ると、三井物産の経営を取り入れた。
- ・大正 8(1919)年以降、百貨店開業の準備。当時は三越と白木屋だけという状況。アメリカで百貨店の創始者ジョン・ワナメーカーの伝記を読み、テーラーの「科学的経営法」を勉強。
- ・大正 14(1925)年開業。
- ・在庫管理、和裁裁断法のマニュアル化を図り、取り扱い商品を増加させ、人材育成を行った。特に宇都宮実業学校(現文星芸術大学附属高校)に店員 70 名を通学させ、一年間勉強させた。
- ・平成 12(2000)年 12 月、上野百貨店倒産。同 14 年には西武デパートが閉店。

家業自慢 (宇都宮城下史)

東方 最高五百万圓

大關	荒物 日野町	崎尾新右衛門	同	大吳服 鐵炮町	鈴木久右衛門
關脇	金貨 寺町、佐野屋	菊地治右衛門	同	池上町 旗店	富岡屋吉助
小結	大物 卸寺町、佐野屋	吉田丹兵衛	同	傳馬町、丸屋	福田小兵衛
頭	質物 茂破町	相良卯之吉	同	藥種、池上町	伊藤屋良助
同	質商 杉原町	池澤伊兵衛	同	質物、傳馬町	横倉重兵衛
同	荒物 上河原町	大谷庄五郎	同	酒造、傳馬町	浪花屋源之助
同	古物 卸寺町、玉屋	古口長藏	同	質物、新石町	福田久右衛門
同	質商 界屋、押切町	篠原與惣次	同	綿、木綿、押切町	笹屋友藏
同	古物 丸井屋	増淵伊兵衛	同	鑿磨、石町	青木屋仁平
同	圓紙 日野町	關口兵右衛門	同	水油、新石町	油屋又右衛門
同	荒物、六道	天野屋 太兵衛	同	荒物、上河町	三河屋久兵衛
同	旗店、傳馬町	手塚屋五郎兵衛	同	糶、真響、小傳馬町	桃屋惣兵衛
同	藥種、大工町	大坂屋 吉兵衛	同	酒造、茂破町	角石善兵衛
同	藥種、傳馬町	松尾屋 孝吉	同	醬油、池上町	常陸屋大助
同	質物、日野町	荒物屋 重兵衛	同	穀物、押切町	福田屋 利兵衛
同	干鰯、大工町	天野屋 清兵衛	同	小間物、押切町	近江屋 金三郎
同	酒造、蓬萊	米屋 兵衛門	同	蒸酒、石町	石塚屋 久次郎
同	質物、八日市場	篠原 治助	同	蒸酒、日野町	安藤屋久左衛門
同	旗店、池上町	谷屋 平右衛門	同	芥菜、押切町	峰屋 茂兵衛
同	古物、宮島町	小松屋 太兵衛	同	小間物	笹屋 佐兵衛
同	古物、宮島町	大出屋 武兵衛	同	水油、八日市場	油屋 友六
同	株物、傳馬町	上野 新右衛門	同	鑿磨、池上町	手塚屋三郎兵衛
同	荒物、傳馬町	手塚 卯兵衛	同	干鰯、傳馬町	土屋 彦七
同	古物、寺町	伊勢屋 新兵衛	同	大物、大町	手塚屋 孝兵衛
同	干鰯、傳馬町	金山屋 卯右衛門	同	麻、日野町	麻屋 宇右衛門
同	質物、元石町	塩谷 茂兵衛	同	芥菜、小傳馬町	石田屋 喜八
同	苳、材木町	永萬屋 幸八	同	穀物、杉原町	葛屋 喜兵衛
同	乾物、茂破町	八百屋 龜藏	同	舍羽、大町	堺屋 利兵衛
同	油、ローソク、日野町	松村屋 吉右衛門	同	材木町、吳服、荒物	日野屋 伊兵衛
同	株物、上河原町	岡非屋 六右衛門	同	醬油、新石町	砂子屋 佐兵衛
同	鑿磨、石町	青木屋 源四郎	同	小間物、鐵炮町	升屋 彌兵衛
同	糶、上河原町	大和屋 喜兵衛	同	造酒、宮島町	非箇屋 清兵衛
同	乾物、池上町	田中屋 平兵衛	同	古道具、押切町	山口屋 太兵衛
同	旗店、傳馬町	稻屋 庄平	同	質物、材木町	澤屋 彦四郎
同	飛脚、大町	岡村屋 常八	同	荒物、池上町	山廣屋 安兵衛
同	小間物	宇賀屋 岩吉	同	鑿磨、石町	田原屋 源助
同	小間物 杉原町	三河屋 仁兵衛	同	古物、石町	堺屋 彌兵衛
			同	蒸酒、本石町	砂子屋 藤八
			同	醬油、新石町	砂子屋 佐兵衛
			同	小間物、鐵炮町	升屋 彌兵衛

爲御勵 嘉永七歲 在甲寅七 月撰之

司行 寄年町 長森植木藤 江田伊左 善左衛門 右衛門 左衛門

1-2

西 方

最高五百万圓

大	關	吳服卸 寺野屋町	菊地孝兵衛
小	關	脇 大栗 日野町、奈良屋	玉尾興兵衛
前	結	質、水油 菊屋	丸田源藏
頭	質物	上河原町	高橋善兵衛
同	醬油	津の國屋	崎尾忠右衛門
同	荒物	杉原町、戸室屋	村山重良兵衛
同	酒造、蜀屋	上河原町	菊地利兵衛同業
同	酒造	池上町	虎屋彦五郎
同	魚店	大町	石田屋 庄兵衛
同	造酒	大工町	荒物屋 直兵衛
同	古着	宮島町	丸井屋 庄藏
同	書林	日野町	荒物屋 伊右衛門
同	古着	宮島町	佐 源兵衛
同	鐵工	大工町	小松屋 礪右衛門
同	こくもつ	大工町	壺谷孫三郎
同	旗店	池上町	加登屋 利右衛門
同	荒物	大工町	手塚屋 儀兵衛
同	糖、小傳馬町		糺屋 直右衛門
同	小間物	池上町	上田屋 山兵衛
同	古着	寺町	流子屋 清兵衛
同	こく物	大工町	砂子屋 藤七
同	藥種	日野町	白子屋 仁兵衛
同	荒物	今小路町	壺屋 寅吉
同	荒物	押切町	堺屋 伊兵衛
同	蕎麥	材木町	なすや 武右衛門
同	丸毫	下河原町	松島屋 藤七
同	旗店	池上町	宿屋 仙右衛門
同	質物	杉原町	石戸屋 茂吉
同	質物	池上町	戸室屋 孝助
同	漆	宮島町	五十嵐源 右衛門
同	麻	大町	升屋 庄兵衛
同	醬油	池上町	駒生屋 宗五郎
同	荒物	千手町	伊勢屋 平七
同	造酒	宮島町	辰巳屋 武助
同	材木	日野町	都賀屋 安兵衛
同	干鰯	大工町	佐野屋 利兵衛
同	小間物		岡木屋 米吉
同	穀物	大工町	常世八良兵衛

同	穀物	石町、長島屋	長島忠左衛門
同	醬油	堺屋、八日市場	篠原久兵衛
同	干物	池上町、菅屋	阿久津久兵衛
同	鐵物	上河原町	鳥居清藏
同	日光	屋	
同	旗店	丸谷、池上町	福田治助
同	池上町	手塚屋	手塚屋 大良兵衛
同	醬油	河原町	岡井屋 八右衛門
同	古着	宮島町	石川吉兵衛
同	賣藥	大町	五十嵐興左衛門
同	染工	新田町	清水屋 吉五郎
同	穀、干鰯	木塚町	油屋 松次郎
同	造酒	傳馬町	松尾屋 彦兵衛
同	質、油	大町	舛屋 嘉右衛門
同	旗店	池上町	村田屋 興三郎
同	古着	宮島町	田野屋 久兵衛
同	質物	今小路町	三河屋 長兵衛
同	魚問屋	大町	舛屋 吉左衛門
同	荒物	大工町	佐野屋 女助
同	造酒	上河原町	岡井屋 仁右衛門
同	質、醬油	傳馬町	堺屋 友右衛門
同	醬油	茂登町	岡木屋 九兵衛
同	穀物	猿路町	福山屋 伊勢之助
同	魚	大町	野子屋 大左衛門
同	古着	宮島町	伊勢屋 忠兵衛
同	紙	杉原町	紙屋 忠藏
同	紙	大町	小島 四良右衛門
同	干鰯	鐵砲町	戸室屋 倉兵衛
同	荒物	上河原町	相模屋 庄吉
同	油	磯崎、日野町	荒物屋 九兵衛
同	蕎麥	小傳馬町	米屋 長藏
同	糖	醬油、小傳馬町	糺屋 藤左衛門
同	材木	大町、質物	中村屋 清藏
同	古着	寺町	深屋 佐七
同	茶店	傳馬町	鳴屋 俊家
同	質物	鐵砲町	田松屋 惣助
同	小間物	傳馬町	非利屋 利右衛門
同	荒物	丸谷	奈良屋 榮吉
同	漆物	池上町	上州屋

西 方

最高五百万圓

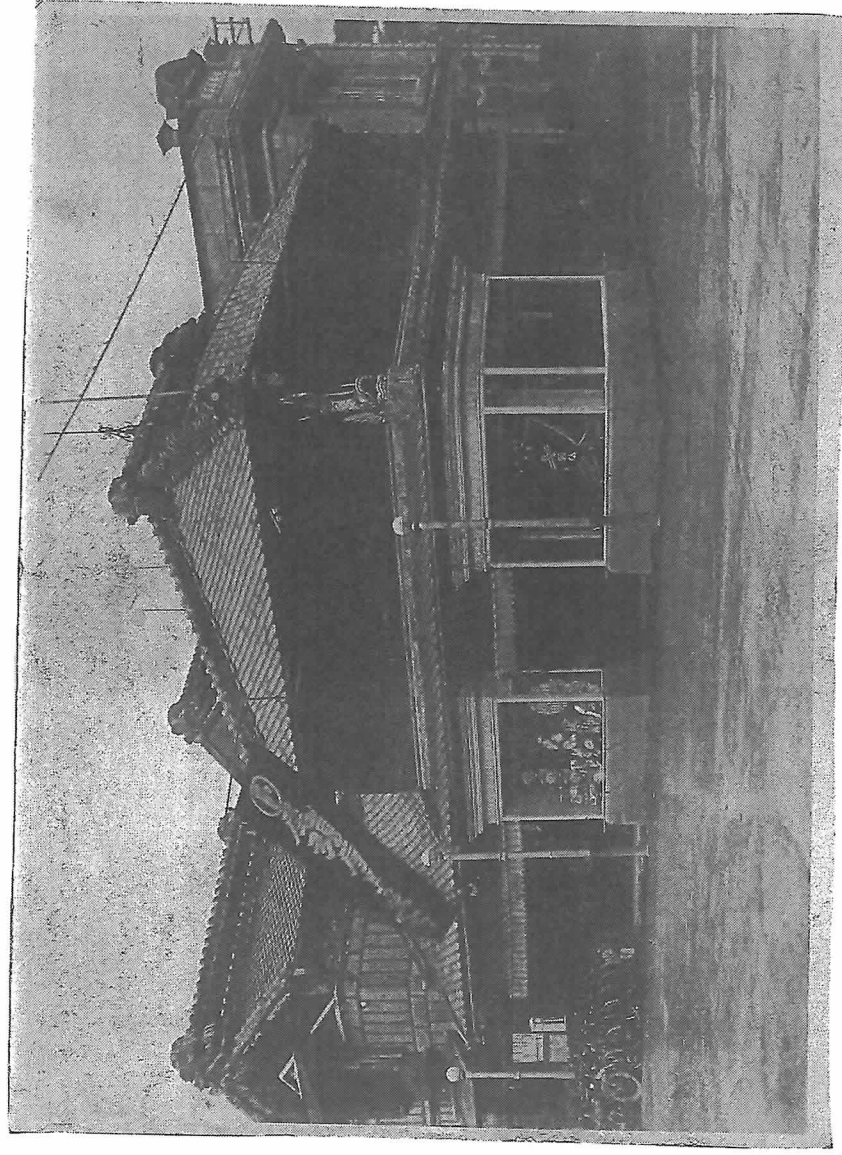
資料3-1

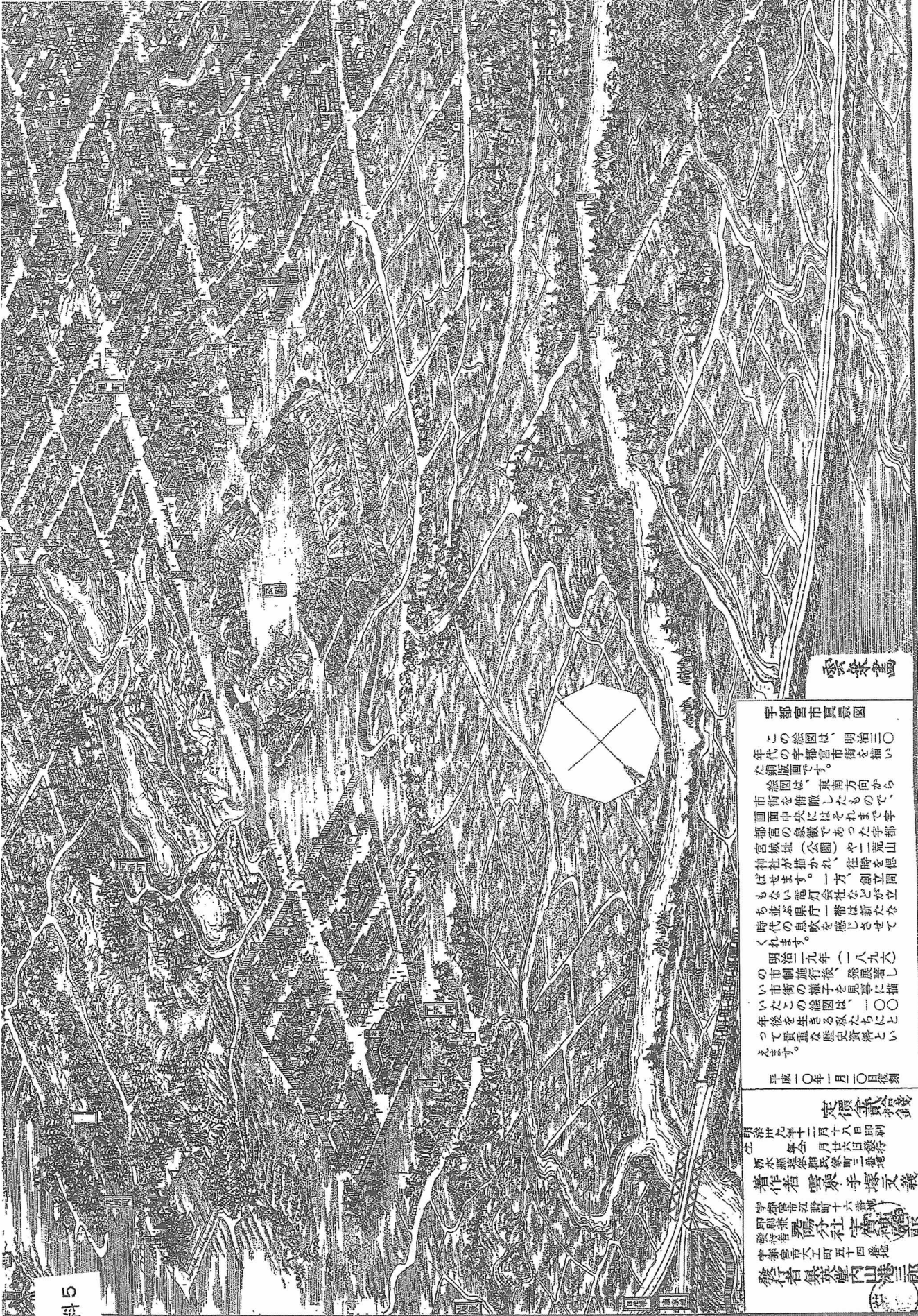


入店時の記念撮影。兄上。

辰球屋号服店

資料2





雲來書画

宇都宮市真景図

この絵図は、明治三〇年代の宇都宮市街を描いた銅版画です。絵図は、東側方向から市街を俯瞰したもので、画面中央にはそれまで宇都宮の象徴であった宇都宮山城址(公園)や二荒山神社が描かれ、往時を偲ばせます。一方、創立間もない電灯会社などが立ち並ぶ県庁一帯は新たな時代の風吹を感じさせてくれます。

明治二十九年(二八九〇)の市制施行後、発展著しい市街の様子を見事に描いたこの絵図は、一〇〇年後を生きる私たちにとって貴重な歴史資料といえます。

平成二〇年五月二日印刷

定價金貳拾錢

明治卅九年十二月十八日印刷
全一冊 毎月廿六日發行
栃木縣宇都宮市三番地

著作者 雲來手塚文義

宇都宮市五丁目十六番地

印刷兼發行 陽分社 宇都宮市

宇都宮市文面五丁目番地

發行者 眞景堂内山港三郎

